

氏名	菅野 麻依子
ヨミガナ	スガノ マイコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第442号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 室内の庭 ードメスティックアートの手法 〈作品〉 接続詞の庭

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	三田村 有純
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	講師	（美術学部）	菌部 秀徳
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	橋本 明夫
（副査）	東京藝術大学	名誉教授		高山 登

（論文内容の要旨）

本論は、2004年の筆者の修士論文のテーマ、“ドメスティックアート”について考察を深め、それを発展させる目的によるものである。ドメスティックアートという身近な場所での芸術のありようについて、社会に対してこれまで実験して得た結果をもとに、類似した方向性をもつ哲学や事象、用語解説といった二次、三次情報を比較検討し、新たな芸術の方向性を導き出すための考察である。具体的には、ドメスティックな空間で鑑賞される芸術の可能性と、空間の所有者がしつらえる室内装飾用の道具、または舞台演出としての工芸品の機能について考察した。人が生きることに必要な芸術とは何か。ひとつの日常生活空間が、もてなしや儀礼で、ハレの空間として使われるときの変化は、どのようなものか。また、生活空間のなかの異空間として据えられている仏間や神棚は、住人の意識にどのように位置づけられているのか。そのような様々な事項について検証した。

私たちは、現在、西洋の形式に甘んじて美術展示を行っているが、本稿では「日本古来の芸術鑑賞法の歴史に沿った日本人ならではの感性を、いかに現代に再生できるか」について様々な方向から考察した。

また、多くの日本人の生活スタイルから切り離され関与されなくなった日本の美術について、そして資本主義経済の社会の中で経済活動のルールから隔離された、芸術活動の本来の意味とあり方について考察した。

本論文は、以下の各章から構成される。

第一章「美術展示の鑑賞方法—日本と西洋」では、風土や文化における日本と西洋の差異に注目し、とくに床の間における日本独自の空間概念についてと、オモテやオク、ハレとケといった時間や空間の設定による日本家屋の仕様に着目し、室内芸術の鑑賞方法について考察を深めた。現代日本で人々の意識に存在する伝統美術と、日本化された渡来文化の近現代美術が、平行線上にあって相容れない二重構造であることを踏まえた上で、同様の外見をもつことさえあるものの、西洋発祥のコンテンポラリーアートとは考え方の全く異なる日本の芸術形式の歴史を振り返りながら顕在化させ、研究対象を明確にした。両者が理解し合えないことがある理由や、日本人が自国の文化として守っていくべき美意識を考察した。また、日本で古来より営まれて来たもてなしとその形について取り上げ、自らの日常生活空間への他者（客人）の迎え方、気遣いや目を楽しませる様々な仕掛けについて述べ、そこから現代社会のための美術のありようについて提言し、また、空間環境が与える心理的作用について考察した。

第二章「美術鑑賞の場としての日常生活空間」では、日常の生活空間が美術鑑賞の場になりうるかを論じ

た。日本の庭や建築内部の障壁画や床の間に共通する、回遊式や上下間の流れの構造が空間に及ぼす雰囲気について論じた。「目のやり場」がどのように人々に鑑賞されているか、またそういった「庭」が、私たちの心にどのような感覚をもたらしているのかを、事例をあげながら確認した。また、しつらいおよびインスタレーションの手法による小世界の創出について言及した。

第三章「もてなしと美術」では、もてなしと美術の関係について、日本とドイツでの筆者が行ったプロジェクトの実例を挙げた。そこで、コミュニケーションを生む時間と空間の工夫について考察した。また、プライベートとパブリックの心理について言及し、人と人の間に生まれるコミュニケーションや緊張感について述べた。また筆者のアーティストランのアーティストインレジデンス事業「ドメスティックアートプロジェクト四方山荘」にて、外国人アーティストをもてなす際に解ったこと、また反対に、筆者がドイツで滞在アーティストの立場でドイツのある地域で行った「リビングルームのアート展」の際に得た経験をもとに、日常生活環境で美術と人々がどのように接していけるかについて検証した。

第四章「室内の造形」では、室内家具道具が空間の性格を形成する要素となっていることを述べ、室内に多く使われる素材「木」について、様々な視点で考察した。また、室内造形物において重要な触覚について言及し、それを鑑賞する楽しみについて述べた。そして、家具道具をテーマにした自作のインスタレーションや石罫彫刻を紹介し、筆者の過去の作品群が、今回の修了制作の基盤となっていることを確認した。美術のもつ視覚とイメージの作用についても言及し、また、室内の日常空間に作品を置く際に、触覚、音、匂い、漂う空気についても考慮が必要であることについて述べた。そして、イメージのための家具や宗教的な家具、自作の作品など、室内において空間を異化する作用をもつ立体造形物について考察を深めた。

終章「ここからの日本の美術」では、筆者が日本のみならず各地での滞在や活動の経験と、身近な実体験から導きだされた“美術の原点”の考察をもとに、日常の生活空間を、ハレとケに区切りながら展示空間として再構成する“しつらい”という伝統的なアイデアを、ドメスティックアートという言葉を用いて現代美術の新たな基盤として活用する可能性について提言し、まとめとした。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、美術館やギャラリーができる以前、美術は居住空間の室内で鑑賞されていたこと、その室内から眺める庭が一つの風景画として機能していたことを踏まえ、インスタレーションで「室内の庭」(筆者はそれをドメスティックアートと言う)を創り出そうとする、筆者の試みを論述したものである。ここで筆者が重視しているのが、「しつらい」(インスタレーション)による「もてなし」の心であり、そこから茶室やそれに到る露路が強く意識されている。「もてなし」であれば、本来“私的”(ドメスティック)な空間がふさわしいため、大学美術館での博士展の展示はやや使いづらい場だったかもしれないが、伝統的な美意識・生活空間との交錯から現代美術を再生させようとする、ユニークな創作論となっている。

筆者はこれまでアメリカやドイツで生活した経験を持ち、ここでの日本文化論も、外から再認識したアイデンティティとしての意味あいを持つ。そのため論文構成も、東西の比較文化論の体裁をとっている。第1章「美術展示の鑑賞方法—日本と西洋」で、厳しい自然から人間を護るヨーロッパの建築では、窓の少ない壁面じたいが絵を飾るギャラリーとしての性格をそもそも持っていたこと。それに対して温暖な日本では、大きく開けられた開口部から見える庭が、室内と連続する風景として機能したことを指摘する。第2章「美術鑑賞の場としての日常生活空間」では、床の間や庭にピンポイントとして置かれたしつらいが、もてなす側の意図をひき立たせる方法であること。第3章「もてなしと美術」では、筆者が住む家で実際に行なったプロジェクト「ドメスティックアート四方山荘」(2007～2010年)について詳述する。そして第4章「室内の造形」で、筆者が木を制作素材とする理由が“しつらいの家具”のイメージにあることと、今回の提出作品「接続詞の庭」を解説する。

筆者はドイツ滞在中の自宅、日本の自宅(四方山荘)での展示など、すでにドメスティックアートを実践してきているが、いずれも外国人作家との共同で行なっている。そのため筆者の日本文化への意識は、グローバルとローカルのバランスがよくとれた、ポイントをおさえたものになっている。旺盛な行動力が、反面、

やや文体の粗さとして表われ、論文作成の遅れも心配されたが、最終的にユニークな発想とメッセージ性の強い論文に仕上がった。発信力のある内容の学位論文として、審査会で合格と判定された。

(作品審査結果の要旨)

平成25年12月19日、博士審査発表展において、5名の審査員全員による公開審査を行った。学位申請の提出作品「接続詞の庭」について評価を述べる。

会場の大学美術館には、9つの部分に分かれ配置される一連の作品が並んだ。作品全体の構成は、9つの部分が高所から低所へと段々と高低差をつけて配置してある。それはまるで水が流れているかのようなイメージを見る者に与える。その個々の造形の構造は樋や筒や桶に似ている。また、そのなかにはシャツとズボンのような被服あるいはフィジカルな意味での身体を思わせる管のような、中空の構造が配置されている。やがて見る者の視線は、桶の構造を持つ造形に流れ込み、最後は床の間の象徴である押し板に集まる。そこには彫り物で水と植物を表した置物が置かれている。

作品の内容は、全体に水のような、何ものかが流れるイメージを鑑賞者にもたせる事を前述したが、そこが重要であると作者は語る。更には枯山水の手法を室内で試みていると言う。注目すべき点は、鑑賞者にとってこの作品は見えないものを想像させられる事にある。またその事によって見る者に、ある種開かれていた印象を与え、作品の見え方に広がりを持たせることに成功している。

さらに、作品制作の内容として挙げられる事は、まず作者は日本の家屋と庭園の関係の美質に注目し、また、その抽象性を制作の軸としている。そして作品は作者自身のメディテーションとしての役割をして、直に心象を表す有効な手法となっている。さらに、作られた作品は移動性に優れ、工芸の成り立ちとインスタレーションの考えが重なる可能性を、「しつらい」に見いだし、論考に留まらず作品化して具体性を持たせている。以上のような内容を持っていると言える。

上記の内容は学位論文の中でも作者自身の言葉で詳しく述べられている。そういった論文の内容に即した作品の成り立ちであるが、その造形は自由を失うこと無く、論文とのバランスを高いレベルで保つことが出来ていると言える。

以上述べたように作品は論文ときわめて整合性を持ち、かつ従来の工芸観でいわれる「工芸即用、技即美」という立場から自己も作品も解放している。さらに伝統的な木工技術の修練と継承に立ちながら、より心象に重点を置いた工芸としての造形表現を目指したことにおいて優れた作品になっており、博士学位授与にふさわしい成果であると評価する。

(総合審査結果の要旨)

本申請者は博士課程に入学するまで、様々な場面で研究にいそしみ、多くの実績を上げて来た。その中には日本国内(茨城県四方山荘)と海外(ドイツ ヘルフォルト)での普通の居住空間である室内をアート化したプロジェクトは、大きな反響を産みだした。西洋の空間は壁に囲まれ、日本の空間は柱建てであり、窓を大きく空ける中での提案である。また本学においても教員歴を有しており、教育現場にての実践と大学運営上においても輝かしい実績を残して来た。

本申請として提出された作品の名称に付いている「接続詞の庭」、論文に付いている「室内の庭—ドメスティックアートの手法」の中の名称は本人がこれまでの実績の中で紡いできた言葉である。この『ドメスティックアート』という言葉は、本人が最も思い入れを持ち、大事にしている造語である。

ドメスティックな空間ということは個人的な場所であり、空間の所有者がここに作品や道具を「しつらえる」ことによって、鑑賞者が見いだす芸術の可能性と、舞台演出としての工芸品の新たな機能について考察している。

美術品は日本や西洋において古くは、建築空間に存在して来た物であり、それが独立して額に入り、単体

としてのオブジェとなり美術館や博物館に飾られるようになってきた。

本申請者はこれからの美術のあり方を日本古来の芸術鑑賞法の歴史に沿った形で、本人に代表される日本人の感性を、いかに現代に再生できるかを問いかけている。

日本的空間の室内に作品を「しつらう」際には五感が大きな意味を持ち、触覚、音、匂い、漂う空気についても考慮が必要であることを念頭に提出作品を完成させている。室内に様々な木材と造形方法によって構築された枯山水に代表される作品を配置させることによって、見えてくる世界は精神世界をも高める物である。

本申請者の論文、作品ともレベルが高く充分に本学の博士号の取得に価する実力を持っている。今後は自身が作家として、また指導者として活躍することを期待している。